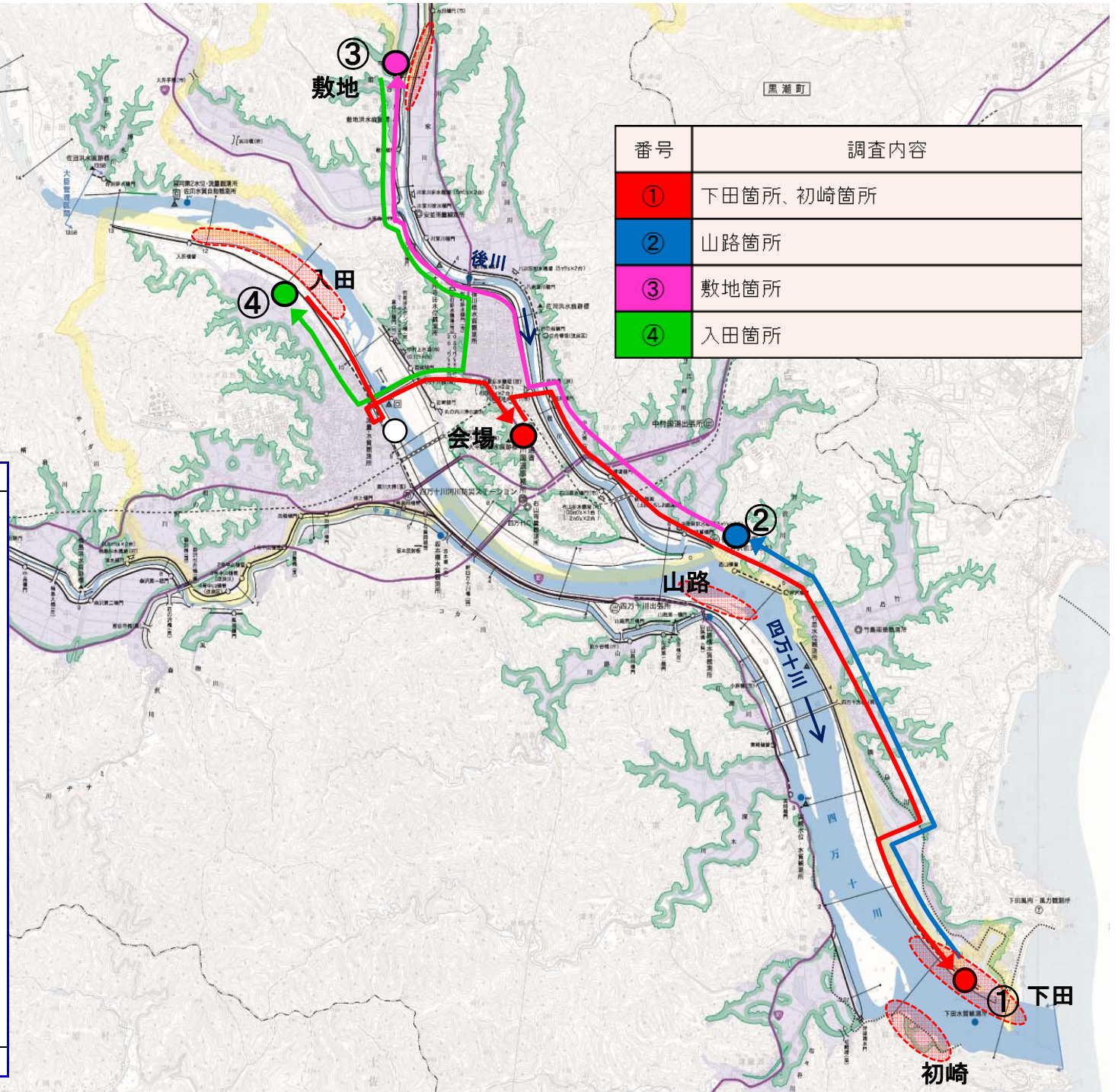


現地調査資料

現地調査ルート図

番号	調査内容
①	下田箇所、初崎箇所
②	山路箇所
③	敷地箇所
④	入田箇所

会議	13:00~13:50 会議
現地調査	14:00 発 会場 ↓
	14:20 着 下田堤防天端 下田箇所、初崎箇所
	14:40 発 下田堤防天端 ↓
	14:50 着 後川出張所 山路箇所
	15:10 発 後川出張所 ↓
	15:20 着 田野川樋門 敷地箇所
	15:40 発 田野川樋門 ↓
	15:50 着 入田 入田箇所
	16:10 発 入田 ↓
	16:20 着 会場
会議	16:30~17:00 会議



① 四万十川 下田・初崎地区

治水面上における現状と課題

- 四万十川河口部は、堤防の未整備箇所があり、近年洪水でも浸水被害が頻発している。
- 0.0~2.0kまでは高潮堤防区間となっており、堤防高が不足している。
- 初崎地区では、波浪の影響による浸水被害が発生している。

河川環境における現状と課題

- 河口部は日本の重要湿地500に選定され、干潟や浅場が多く存在し、汽水・海水性の動植物の重要な生息場となっている。
- 代表例として、アカメ、トビハゼ、シオマネキ、ヨドシロヘリハンミョウなどの重要種が生息している。
- 干潟や浅場は、魚のゆりかごとなるコアマモ場や全国一の出荷量を誇るスジアオノリが生息・生育する環境であるが、コアマモの生育面積、スジアオノリの漁獲高は年々減少している。
- 河畔林と下田地区を含む四万十市入田から河口までの区域は、文化財保護法に基づき平成21年2月に重要文化的景観に選定されている。



② 四万十川 山路地区

治水面上における現状と課題

- 山路地区（4.6～6.2k付近）および不破地区（6.8～8.9k）は、昭和40～50年代に実施された砂利採取で河床が低下した。砂利採取禁止後、徐々に砂州は回復し、河床高が上昇している状況である。
- 平成以降、高水敷に樹木群が繁茂しはじめた。
- 上記の土砂堆積や樹木繁茂が、洪水時の流下断面の阻害となっており、河積の確保が課題である。

河川環境における現状と課題

- 四万十川下流域は重要文化的景観に選定されており、天然スジアオノリ自生地は、その重要な構成要素になっている。
- 一方で、コアマモ生育面積、スジアオノリ・アユ漁獲量が減少しており、コアマモ生育面積は過去17年でおよそ半減、スジアオノリについても多少の年変動があるが経年的には減少し、近年は極めて不漁である年が多い。
- 仔稚魚が成育・生息するコアマモ場やスジアオノリなどが生育（浅場・干潟）する浅場環境を回復させる必要がある。
- 山路地区の右岸3.4～5.4kの高水敷はゴルフ場として利用されている。
- 河川整備の実施にあたっては、仔稚魚が成育・生息するコアマモ場や、スジアオノリなどが生育する浅場環境の保全・回復を図る必要がある。



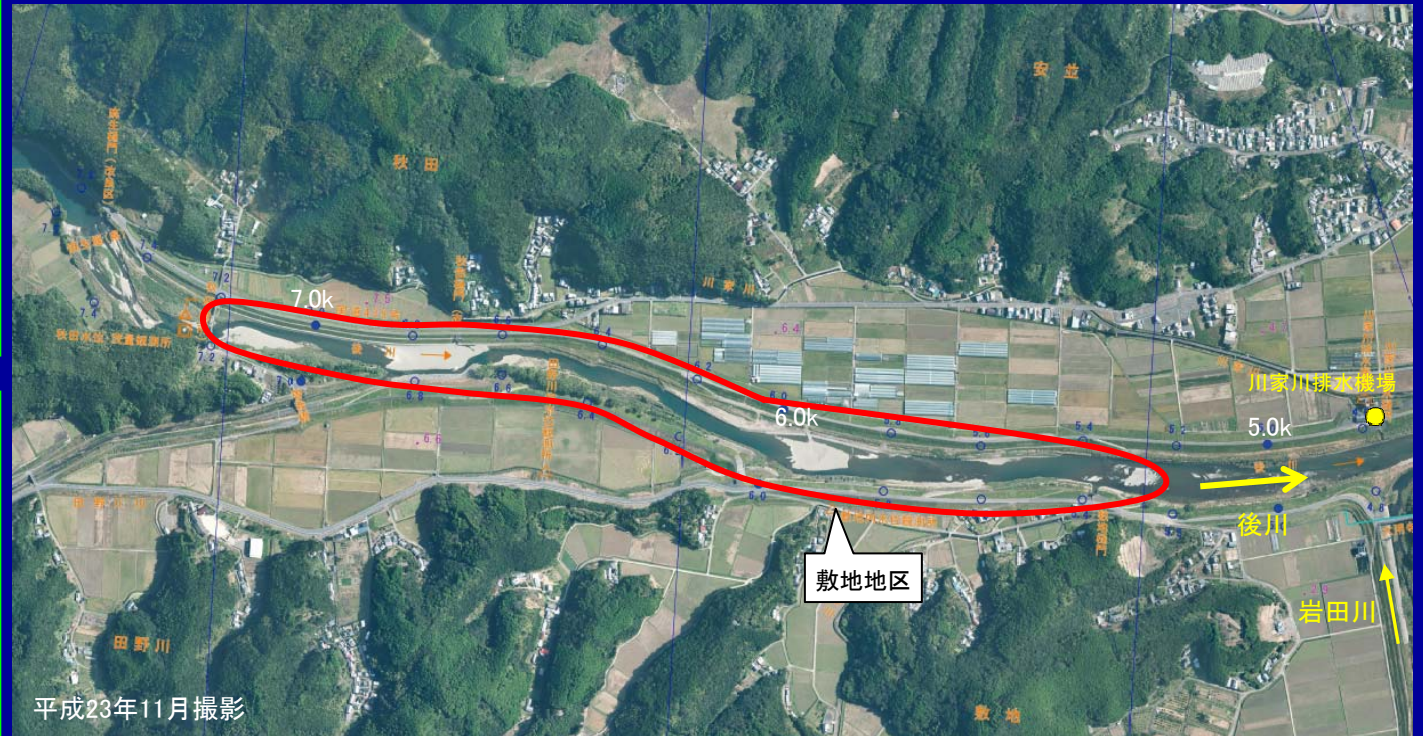
③ 後川 敷地地区

治水面上における現状と課題

- 敷地地区を含めた後川中・下流部は、戦後最大の平成4年8月洪水などに対応し堤防整備を進めてきた結果、堤防がほぼ概成している。
- ただし、河道内樹木の繁茂や局所的な土砂堆積が、洪水時の流下断面の阻害となっており、河積の確保が課題である。
- 上記を踏まえ、岩田川合流点（4.8k）付近は、近年樹木伐採や河床整正を実施したところである。

河川環境における現状と課題

- 河道内の砂礫堆上にツルヨシ群集が分布する。山付部のアラカシ群落・メダケ群集が水際に分布する林縁的環境は魚類の餌場となるとともに、森林性の鳥類や昆虫類の重要な生息環境となっている。
- 山林から水辺までの植生の連続性が確保されていることから、陸上動物の水辺域までの移動経路としても重要な環境となっている。
- 回遊魚の確認種数が多く、ボウズハゼ、カマキリなどが確認されている。瀬やワンド、たまり等の多様な環境の特性を反映し、水生昆虫が幅広く確認されている。



④ 四万十川 入田地区

治水面上における現状と課題

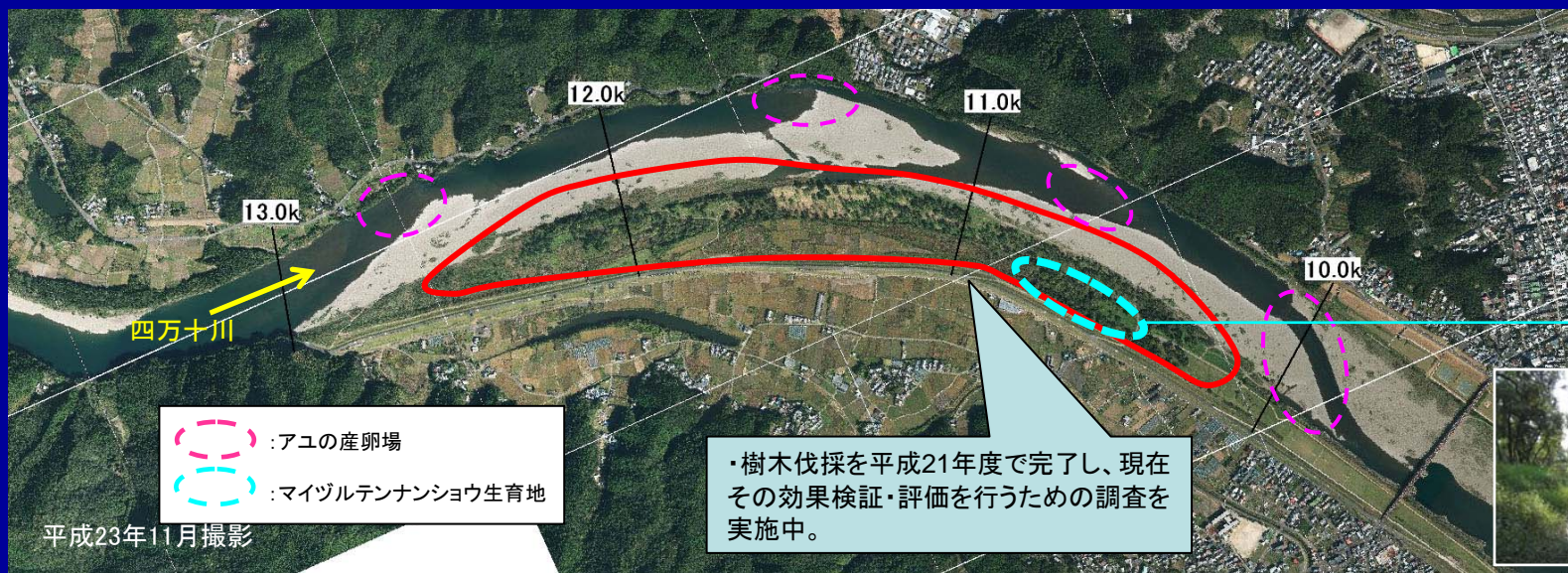
- 破堤した場合に入田・具同地区に甚大な被害をもたらす右岸堤防は概成している。
- 平成以降の樹木群の繁茂や、局所的な土砂の堆積により、洪水時の流下断面の阻害となっており、河積の確保が課題である。

河川環境における現状と課題

- アユの産卵場となる瀬は、洪水時に移動を繰り返しているが、概ね入田地区に集約している。
- ただし、アユの漁獲高はデータの存在する昭和50年と比べ大幅に減少している。あわせて産卵場面積も、昭和40年代～昭和50年初頭と比べ、約5割と減少している。
- 水際にはワンド・たまり等の止水域が形成され、コガタノゲンゴロウなどが生息している。
- 陸域は森林性の鳥類や昆虫類の重要な生息環境となっており、一部にマイヅルテンナンショウも生息している。
- 治水面上における課題の解消のため整備を実施する場合には、アユの産卵場となる瀬が形成されやすい河道形状としつつ、現状のバランスのとれた生物の生息環境の保全を図る必要がある。

自然再生事業

- 平成14年度よりアユの産卵の場としての早瀬を再生する「アユの瀬づくり」を通じて、かつて（昭和40年代）の広い砂礫河原、水面を再生することにより、原風景の復活、人と良好な自然環境との共生に貢献する自然再生事業を実施中である。
- 具体的には、河川物理環境の復元を目指して、現在は第一期施工で樹木伐採を完了し、今後は砂州の切り下げを実施する予定である。



マイヅルテンナンショウ



ワンド・たまり



コガタノゲンゴロウ